

# 海外移住 資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館  
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階  
Tel:045-663-3257(代) URL: <https://www.jica.go.jp/jomm>  
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 熊谷晃子

企画展示

## シアトルのハントホテル —日本語学校の知られざる歴史1945-1959

2020年11月21日(土)～2021年2月14日(日) JICA横浜 海外移住資料館(企画展示室)



"Communal Kitchen"  
Aki Sogabe, 2014

【特集】

企画展示

シアトルのハントホテル

—日本語学校の知られざる歴史1945-1959

【TOPICS】

- 第一回JICA海外移住懸賞論文授賞作品発表
- くまモンが資料館にやってきました!!
- 公開講座「日系人アイデンティティとの再会  
—尺八を通して叶えた、熊本におけるルーツ探し—」

## 企画展示

# シアトルのハントホテル

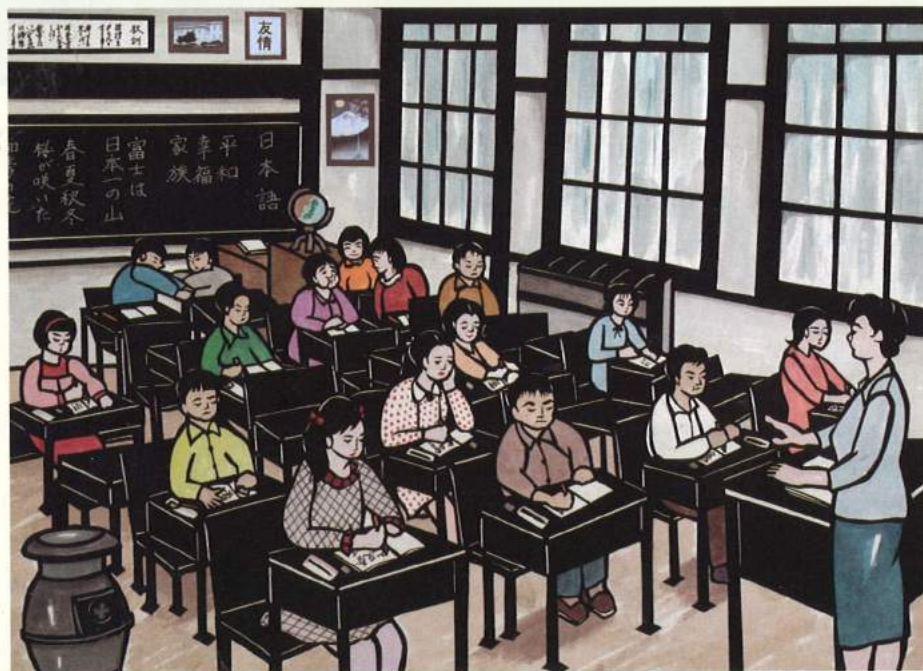
## —日本語学校の知られざる歴史1945-1959

アメリカ西海岸・ワシントン州シアトル。戦前、日本から移住した人々が集まって日本町を形成し、日本人移民の営む商店や市場は大変な賑わいでした。しかし、第二次世界大戦が始まると、日本人移民とその子孫は「敵性外国人」として住む家を追われ、強制収容所に隔離されます。

戦後、家も財産も失った行き場のない人々が、住み慣れたシアトルで生活を立て直すための仮住まいとして過ごし

た場所が、北米最古とされる日本語学校校舎でした。仮住まいとなった校舎は、戦時中、シアトル日系コミュニティの人々が隔離されたミネドカ収容所のあったアイダホ州の町「ハント」にちなんで「ハントホテル」と呼ばれました。

これは、居場所を追われた人々が再び生活を取り戻す舞台となった、日本語学校の知られざる物語です。



"Seattle Japanese Language School" Aki Sogabe, 2015  
戦前の最盛期には1,300人を超える生徒が在籍していたシアトル日本語学校



曾我部アキさん

この展示は、ワシントン州日本文化会館(JCCW)が行った聞き取り調査と切り絵作品によって構成され、2016年にシアトルで開催された特別展示の内容をもとに、日本語版を作成したものです。

切り絵作品は、北米在住の日本人アーティスト・曾我部アキさんによるもの。曾我部さんの作品は、ワシントン州の30を超える公立学校に展示されているほか、シアトルの観光名所であるパブリックマーケットや宇和島屋ビレッジ等にも設置され、パブリックアートとして高い評価を得ています。

本展示では、解説パネルのほか、曾我部アキさんの作品や元居住者たちのインタビュー映像など、貴重な資料とともにシアトル日系コミュニティの歴史を振り返ります。

## 物語の舞台、シアトル国語学校

物語の舞台は、1902年に創立した北米で最も古いといわれる日本語学校「シアトル国語学校」(後の「シアトル日本語学校」)。日本からの移民とその子どもたちが日本語や日本文化を学ぶ場所でした。創立当初、教室一つに生徒4人という小さな一歩を踏み出したシアトル国語学校は、1902年から1912年の間に何度かの移転を経て、16番街とウェラー通りの角にある一区画の土地を購入。土地の購入や新校舎の建設にあたっては、有力な一世だけでなく個人や小さな団体などからも寄付が募られました。また、伏見宮貞愛親王や、小村寿太郎外相、東郷平八郎海軍大将、徳川家達公爵など、当時たまたまシアトルに立ち寄った日本の皇族や外交官、実業家等からも多額の寄付が寄せられたといえます。

現在のシアトル日本語学校の建物は1913年1月に完成し、さらに二つの建物がそれぞれ1917年と1925年に完成しました。後にハントホテルの居住者となる人々の多くは、第二次大戦前にこの日本語学校に通っていた生徒とその家族でした。



1935年 シアトル日本語学校校舎

## 奪われた日常



"Leaving" Aki Sogabe, 2005  
収容所に向かう列車に乗り込む人々



戦前のシアトル日本町

第二次世界大戦が始まると、日系コミュニティのリーダーたちが根拠もなく「日本のスパイ」だと疑われ逮捕されました。シアトル日本語学校でも校長が逮捕され、学校は閉鎖に追い込まれました。

真珠湾攻撃から2カ月が経った1942年2月19日。大統領令により、アメリカ市民権の有無に関係なく、西海岸沿いに住む11万人以上の日本人移民とその子孫の強制退去が始まりました。そのうちの7千人以上がシアトルとその周辺に住んでいた人々でした。彼らの家や商店などは二束三文で売り払われ、板で塞がれ、荒らされたのでした。

立ち退きまでは十分な時間もなく、収容所に持っていくことのできる荷物の数にも制限がありました。持って行くことができない家財道具の保管場所として、シアトル日本語学校の校舎が使われました。

## 行き場のない人々を受け入れた「ハントホテル」

シアトルにいた人々の多くは、アイダホ州のミネドカ強制収容所に入れられ、何年もの間、過酷な気象条件のなか粗末な居住施設でプライバシーや自由のない生活を強いられました。ようやく収容所を出る時が来ると、彼らが一生涯懸命築いたシアトルの日系コミュニティはもうなくなっていました。それでも、ほとんどの人がかつて暮

らしたシアトルへと戻って来たのです。

住む家を失った人々のために、シアトル日本語学校の校舎が提供され、25家族以上が共同生活をはじめました。そこでは、月24ドルほどの家賃で雨露をしのぐことができ、必要な物資と保護を受けることができました。

## ハントホテルのおわりと日本語学校の再開

その後14年間にわたり、ハントホテルは居住者を支援し続けました。最低限の設備に定員を超える人数が暮らしていたにもかかわらず、狭い共用空間の中で親世代（一世たち）がどれほど忍耐強く、礼儀正しかったかを、元居住者たちは憶えていると言います。

1950年頃までに、ほとんどの家族が仕事を見つけ、新生活のための資金を貯えました。年を取り、体が弱った一世は、ハントホテルで友人たちに囲まれて穏やかに最期の日々を過ごすことができました。

居住者たちが徐々にハントホテルを離れ始めると、日本語学校を再開させる計画が動き始めました。まだ数人の居住者が残っていたものの、1956年までに日本語学校が再開し、1959年に最後の居住者が亡くなると、ハントホテルはその役目を終えたのです。

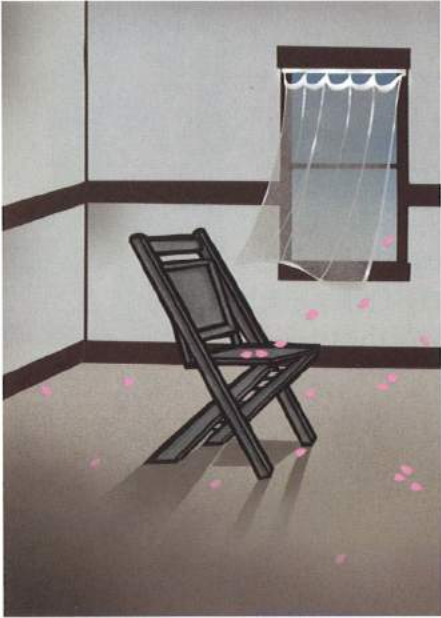


"Shared Room" Aki Sogabe, 2015  
ロープやシーツで教室を区切って生活していた



"Moving On" Aki Sogabe, 2015  
新しい生活基盤を整え、ハントホテルを離れる家族

## 残る無念



"Empty Chair" Aki Sogabe, 2014

戦争ですべてを失った何千人もの一世と、ハントホテルで最期を迎えた一世たちの思いを代弁するような、主のいない空の椅子

二世や三世たちは、その後何年にもわたり、第二次大戦中の不当な強制収容や差別に対する正義の実現を訴え闘いました。謝罪と補償を求めたこの運動は、1988年ようやく実を結びます。ロナルド・レーガン大統領が署名した市民自由法によって、公的教育への資金、不当な収容に対する2万ドルの支払い、政府からの公式な謝罪をついに勝ち取ったのです。

運動自体は成功しましたが、ほろ苦いものでもありました。19世紀後半にアメリカ西海岸に渡り、強制収容によって辛酸を舐めた一世のほとんどが、この時には既にこの世を去っていたのです。最も謝罪を受けるべきであった一世の多くが公式謝罪を見届けることなく亡くなったことはなんとも無念なことでした。



現存するシアトル日本語学校の校舎(2016年撮影)。現在は、ワシントン州日本文化会館(JCCCW)のオフィスとして日系コミュニティの活動拠点のひとつとなっている。

## ハントホテル 元居住者たちの 回顧録

企画展では、ハントホテルへの入居から約50年の歳月を経て、元居住者たちが当時暮らした校舎にはじめて集った際のインタビュー映像を上映しています。当時まだ子どもだった元居住者たちの言葉からは、親世代のつましい振る舞いや、ハントホテルで過ごした日々が、質素ながらもわびしいものではなく、楽しい遊び場のようなものでもあったことが伺い知れます。



"Hallway Activities" Aki Sogabe, 2015 子どもたちにとっては楽しい遊び場だったハントホテル



「当時いた部屋に今日来てみると、もっと大きな部屋だったように感じます。ワイヤーカーローブを吊って、シーツをかけて世帯ごとに仕切りました。軍用の簡易ベッドを並べて、もう一つ仕切りを作って自分たちのベッドを隠しました。みんな、小さな声で話してとても礼儀正しくしていました」

ペギー・タネムラさん



「私の家族はここで2年間暮らしましたが、収容所から日常の生活に戻るまでの、ちょうどいい期間でした。地に足をつけて新しい生活をはじめるために必要な時間だったのではないかと思います」

ショウキチ・トキタさん



「あちらのお母さんが「お邪魔ですみません」と言えば、私の母は「いえいえ、相部屋出来てよかったです」と言ったものでした。こうした礼儀正しいやり取りがしょっちゅうありました。「失礼」「お先に」。そんな日本的なやり方で、当時の状況を乗り越えたのです」

ヤスコ・キノシタさん



「私は少し年上の子たちのグループでしたが、いっしょに競争する遊びをよくやりましたよ。外では陣取り、夜には懐中電灯を使って戦争ごっこをしたり。本当によいコミュニティでした。辛かったことはあまり覚えていません」

アート・ナガイさん

# ハントホテルの管理人・三原源治



シアトル日系コミュニティを語るうえで欠かせない人物が、三原源治です。1890年、島根県出雲市で生まれた三原は、1907年、17歳の時に単身で北米に渡りました。英語を学ぶことを目的とした、短期滞在のつもりだったといえます。

シアトルでの生活が気に入った三原は、戦前、パイオニアスクエアで「オキシデンタル・カフェ」というレストランを経営していました。熱心なクリスチャンであったこともあり、その面倒見のよさと行動力で、シアトル日系コミュニティのリーダーとして多くの人に慕われていました。

しかし、真珠湾攻撃の直後、日本のスパイであるという疑いをかけられて不当に逮捕されてしまいます。当時、このような根拠のない疑いをかけられた日系コミュニティのリーダーたちは、家族や一般の人々が収容された戦時転住局の収容所ではなく、司法省の強制収容

所に拘留され、何年間も家族と離れ離れの生活を強いられたのでした。

強制収容所でも三原は、耐え難い生活を少しでも改善するために、必要最低限のものが与えられるよう提言するなど、拘留者たちの待遇改善を求めて闘いました。そして、収容所内の「代表責任者」として任命され、拘留者たちの声を代弁したのです。

拘留から2年後、ようやくシアトルの日系人の多くが収容されていた、アイダホ州のミネドカ収容所に移り、家族と合流することができました。

戦後、1945年に家族と共にシアトルに戻った三原は、日系人たちの生活再建とコミュニティ再生のために身を捧げ、日米の関係強化にも尽力しました。シアトル日本語学校の校舎を行き場のない人々に開放し、ハントホテルの管理人として居住者たちを支援した三原。渡米以来、1982年に92歳でこの世を去るまで、シアトル日系コミュニティのパイオニアとして人々のために活躍し続けた人生でした。



三原源治が経営していたレストラン「オキシデンタル・カフェ」

企画展示ではこのほかにも、  
シアトル日本町のなりたちや  
現在の姿なども  
紹介しているわよ。  
ぜひ観に来てね!



## TOPICS

### 第一回JICA海外移住懸賞論文 授賞作品発表

日本国内に急増する外国人とのよりよい共生が課題となるなか、日本人の海外移住150年以上の歴史に対する理解と関心を高めることを目的に、2019年度に創設した「JICA海外移住懸賞論文」。「中南米地域の邦字新聞を活用した日本人移住に関する諸研究」をテーマにした第一回の応募作品から、3名の論文が受賞しました!たくさんのご応募どうもありがとうございました。

授賞者3名には、今後開催予定のオンライン講演会にて講演いただく予定です。(最優秀賞・長村裕佳子さんの講演会については、P6「今後の予定」をご参照ください)

なお、第2回の募集案内は近日中に公開予定です。

#### 【最優秀賞】

ブラジル日系二世エリート の立候補と投票をめぐる心情と論理  
一戦後の民主化における1947年選挙を事例にー  
長村裕佳子さん(上智大学外国語学部特別研究員)

#### 【優秀賞】

『らぶらた報知』の創刊と「在亜沖縄県人連合会」の設立  
月野楓子さん(関西外国語大学外国語学部助教)

#### 【特別賞】

「フジャマのトビウオ」とブラジル日系コロニアの戦後  
乗松優さん(ポートランド州立大学歴史学部・客員研究員)

## くまモンが資料館にやってきました!!

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、当館は2020年2月28日より7月20日まで臨時休館となりました。それに伴い、3月～6月にかけて開催予定だった企画展示「くまモンと学ぼう! 熊本移民の歴史と活躍—こぎゃんすごか、わさもんと肥後もっこす—」は、期間を変更し、7月21日(火)～10月25日(日)まで開催しました。

看板やポスターに描かれたくまモンに誘われて立ち寄る方も多く、「くまモンと一緒に楽しく見学できた」「熊本県からの移民について、人物を中心に説明してあるのがとてもわかりやすかった」などの感想が寄せられました。

また10月12日には、くまモンが来館! 熊谷晃子館長に案内されながら企画展示を見学し、「とっても楽しく勉強できたモン! 熊本から移住したすごか人たちがたくさんいたモン!」とご満悦の様子でした。

くまモン来館の様子は後日当館ウェブサイトに掲載する予定です。お楽しみに!



©2010 熊本県くまモン

## 尺八の音色に癒される公開講座 「日系人アイデンティティとの再会 —尺八を通して叶えた、熊本におけるルーツ探し—」



熊本展関連の公開講座は、10月3日(土)に開催。感染拡大を防ぐため事前申込制とし、定員20名の枠を設け、なるべく密を避ける工夫をしながらの開催となりました。講師の淵上ラファエル広志さん(ブラジル出身・三世)は、自身が体験したルーツ探しの旅をたくさんの写真を交えながらお話くださいました。

後半のミニコンサートでは、淵上さんのやわらかな尺八の演奏に、ゲストの米谷麻梨さんの三味線と素敵な歌声が重なりました。受講者からは、「尺八の生演奏は初めてだったけど、素敵な音色に感動した」「淵上さんの運命的な体験を聞いて、たくさんの人に知ってほしい話だと思った」等の感想が聞かれました。

公開講座の様子は、後日当館ウェブサイトに掲載する予定です。

## 海外移住資料館 周辺マップ



### 今後の予定

#### 12月18日(金)

【オンライン講演会】第一回JICA海外移住懸賞論文 最優秀賞受賞者講演会  
「ブラジル日系二世エリート立候補と投票をめぐる心情と論理—戦後の民主化における1947年選挙を事例に—」  
講師:長村 裕佳子氏(現・JICA緒方研究所 研究助手)

#### 1月下旬

【オンライン公開講座】「シアトル日本町とワシントン州日本文化会館」  
講師:中村有理沙氏(ワシントン州日本文化会館スタッフ)

- 開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで)
- 休館日 月曜日(月曜日が祝祭日の場合は翌日)・年末年始
- 入館料 無料

### アクセス

- みなとみらい線:  
「馬車道」駅(4番出口)から徒歩約8分  
「みなとみらい」駅(クイーンズスクエア方面改札)から徒歩約15分
- JR線・市営地下鉄:  
「桜木町」駅から(汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク)徒歩約15分
- 市営バス:「ハンマーヘッド」から徒歩約2分